ASEAN グローバルプログラムに参加して

植　田　龍之介
Ryunosuke UEDA
環境ソリューション工学科　２年

1. はじめに

2019 年 8 月 27 日から 9 月 5 日にかけて，ASEAN グローバルプログラムに参加し，表 1 の様にベトナムとシンガポールにて，栄光堂ベトナム訪問，Rikkei Soft 訪問，ハノイ工業大学との PBL，南洋理工大学での各種見学，Google 社訪問，IT 企業の日本人やアドバイザーの講演・交流会を経験できた．本稿ではこのプログラムに参加した目的，研修内容，そこから得たことや感じたこと，それについての課題などを報告する．

表 1　研修日程

8 月27日（火）	出国，ベトナム着，オリエンテーション
8 月28日（水）	栄光堂，Rikkei Soft 訪問
8 月29日（木）	ハノイ工業大学での PBL
8 月30日（金）	PBL 最終プレゼン
8 月31日（土）	戦勝記念博物館，文廟訪問
9 月 1 日（日）	ベトナム発，シンガポール着，講演
9 月 2 日（月）	南洋理工大学訪問 （講義参加，研究室見学）
9 月 3 日（火）	Google 社訪問，ビジネスパーソンとの交流会
9 月 4 日（水）	シンガポール発
9 月 5 日（木）	帰国

2. 参加目的

近年，ベトナムやシンガポールの成長率には様々な企業が注目している．これらの国々の成長理由は，現地に行くことでより感じることができると考えた．今回のプログラムでは，日本では味わえない海外ならではの刺激を感じ，その経験からこれからの生活をより充実したものにすることを目的とした．また，今までに培ってきた英語力が海外でどれほど通用するのかということも確かめたかった．

3. 研修内容

3.1　ハノイ工業大学生との PBL

ハノイ工業大学での PBL は，2 日間かけて，龍谷大学の学生 4 名，ハノイ工業大学の学生 2 名の計 6 名のグループで行った．PBL 活動のテーマが「栄光堂ベトナムの商品をベトナム市場で大ヒットさせる」に設定されており，どのように工夫したら売れるかについてハノイの大学生にアンケート調査し，その売り出し方を提案した．

私たちの班は，塩レモン飴の持ち運びをより便利にするためにコンパクトなスティック状にして売り出すことを考えた．この内容は事前にメールでベトナム人学生に伝わっていたが，より詳しい内容を英語で伝えることが困難であった．一部の内容を伝えることができても，ベトナム人学生の英語を聞き取ることができず，コミュニケーションに苦戦を強いられたとともに，ベトナム人学生の積極性や考察力に圧倒された．しかし少しずつ英語にも慣れていき，2 日目からは緊張もほぐれ，伝えたいことをスムーズに伝えられるようになり，協力して考えられるようになった．ハノイ工業大学でアンケートを取り，試行錯誤を繰り返しながらプレゼン用のポスターを完成させた．ポスターの内容は英語で発表しなければいけなかったためベトナム人学生に全て任せようと考えたが，それではこのプログラムに参加した意味がないと思い，ベトナム人学生 1 人と日本人学生 1 人で発表を行った．

この PBL 活動を通して，様々な視点から見る物事の捉え方や何事にも恐れず，逃げずに挑戦する大切さを改めて実感したとともに，自分が成長するためのヒントを得ることができた．写真のポスターは，昼間ハノイ工業大学で行なった英語のプレゼンテーションではなく，夜に，現地の日本人マーケッター二人に対して行なった日本語での最終プレゼン

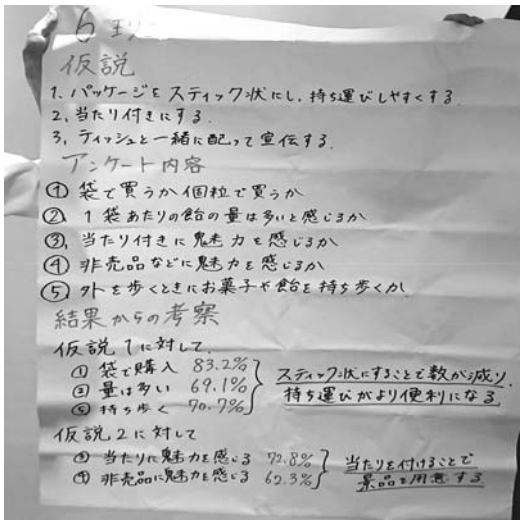

写真　PBL で作成した日本語プレゼン用のポスター

の際に使用したもので，約 1 時間で作成した．内容を分かりやすく，より端的に伝えるために，1 枚にまとめることを意識した．

3.2　ビジネスパーソン交流会

PBL 以外で印象に残っていることとしては，海外で活躍されている 4 名のビジネスパーソンの方々との交流会がある．皆様とても親身に話をしてくださったことで，卒業後の自分の姿を考えるきっかけになった．話の中でも特に印象に残っているお話は，龍谷大学の卒業生である芝崎公哉さんの話である．芝崎さんは在学中に経験すべきことや目標に対する具体的なイメージの作り方などを教えてくださった．そこでは「やらなければいけない場に自分を置くことで，得られるものがある.」という言葉も頂いた．この言葉が印象に残っており，今回の ASEAN グローバルプログラムを通して，確かにその通りだと実感させられた．私は英語が苦手で，始まるまでは現地学生との PBL にとても不安を感じていた．実際 PBL が始まっても，自分の言いたいことが伝わらなかったり，相手の言葉が聞き取れなかったりと苦戦した場面は多々あった．しかし，英語を使わなければいけない場に自分を置くことで，英語に対しての意欲が湧き，率先してコミュニケーションをとれるようになっていた．芝崎さんがおっしゃっていた通り，やらなければいけない場に自分を置くことで，英語への積極性を得ることができた．この経験を糧に，これから先厳しい環境に置かれたとしても，その環境からたくさんのことを学び，活かしていきたいと思う．

4.　おわりに

今回のプログラムは 10 日間という短い間だったが，短期間ということで，毎日全力でチャレンジでき，密度の濃い日々を過ごすことができ，様々な経験を味わうことができた．また，ハノイ工業大学の学生や現地で働いている方々と交流することで，今回の参加目的であった海外ならではの刺激を感じることも十分できた．加えて，自分自身の英語力の低さや積極性のなさなどの課題点も見つかった．これらの課題に対し，この ASEAN グローバルプログラムが終わった後もだれることなく，気を引き締めて様々なことにチャレンジしていきたいと思う．特に，英語に関するプログラム活動があれば，積極的に参加したい．

もし，この研究活動報告を読んでくれている後輩がいるなら，是非この ASEAN グローバルプログラムに参加してほしいと思う．この海外での経験は必ず自分の力になり，将来へ向けて成長させてくれると確信している．